

「肝切除のテクニックと患者管理」

国立がんセンター部長 長谷川 博 著

秋田大学教授

小 山 研 二

本当に、掛値なしに役立つ手術書というのはこのような書物を指すのであろうか。本書の著者、長谷川博先生は大変ユニークで、しかも読者を納得させずにはおかない論文を多数発表されている、名実ともに肝臓外科の第一人者であられることは今更言うまでもなからう。

本書は、まず氏の体験に基づく極めて実的な肝切除の適応や、開腹時に術者にどのように見えているかという現実即した肝の外科的解剖が示されている。次いで肝切除における基本的注意事項が極めて具体的に述べられ、また氏の愛用されている少数の、平凡に見えながら工夫の凝らしてあるハサミや剝離鉗子などが提示されている。肝切除の実技の項では開創の重要性、肝門処理をはじめとする肝切除に共通、必須な諸諸の手法やそのコツが懇切丁寧に記されている。更に、肝の各区域の切除について特有な事項が補足説明され、また術前術後の管理上の諸問題

を、多数の経験と深い洞察から既成の観念にとらわれない見解を述べておられる。このほかに随所に現れる trouble-shooting と coffee break は心にくいばかりである。前者は肝切除においてしばしば起こる小さな事件の対策から、術者の目の前を真暗にするような大出血に対する自信あふれた適切な対処の仕方も教えてくれる心強い味方である。後者は、一見気軽そうに、しかし実は氏の動かざる信念を披瀝しておられる楽しくも有益な欄である。

本書は肝切除をしたいと願う若き外科医にとっては、自分でもできそうだと大いに勇気づけてくれる書であり、また、多少の肝切除経験を持つ者には、いかに己が至らなかったかを反省させると共に目のウロコがとれる思いをさせる書である。更に、経験豊かな外科医も本書を読み進むうちにハタと膝を打ち、また思わずニヤリとさせられるであろう。はたまた、肝切除にはあまり縁のな

い領域の医師にも本書は armchair traveler における地図や時刻表の役割を果たして、いわば armchair hepatectomyとも言うべき喜びを味わわせてくれよう。

このように広範な読者層が予想されるのは、本書が200例以上の肝切除自験例の詳細な観察と検査データの分析という実践から生まれたものであり、それぞれのレベルの読み方ができるからである。更に、氏が肝切除の過程で体験された困惑と恐怖感と、そしてそれをいかに解決したか、いわば durch Leiden Freude を1人でも多くの同学の士に与えようという氏の広い心と熱意が読者の心を打つからであろう。この書は、まさに燎原の火のごとく全国の外科医の間に広まるに違いない。そしてそここの手術室で“さあ、ひさしくずしをやろう”、“こんどはよだれかけを剥ごう”、“押し売り押し売り”などと、簡明にして核心をつき、しかも術者を過度の緊張から解放してくれる氏一流の警句が流布するであろう。氏の真摯な、良い意味での教祖の雰囲気と、長谷川流秘伝とも言ふべき巻物があますところなく公開された本書の熟読を広くお奨めしたい。

B5 横判 182 頁 図 39 写真 11 原色図 47
色図 6 1985 年 ¥13,500 円 400

医学書院 刊